

動脈硬化の危険性とその対処

佐久間一郎 第1回

(さくま・いちろう)



1979年北海道大学医学部卒業。83年同大学院医学研究科修了、医学博士。北大医学部循環器内科講師を経て、05年北光記念クリニック所長。日本循環器学会専門医。日本臨床薬理学会専門医・指導医。日本動脈硬化学会・日本糖尿病学会委員。日本性差医学医療学会理事「脂質異常症の診断と治療委員会」委員。

2011.7月号 202

コレステロールへの正しい対応

コレステロールには、血管に貯まって動脈硬化巣を作る悪玉(LDL)コレステロールと、血管からコレステロールを抜き取って肝臓から排泄し、動脈硬化を減らす善玉(HDL)コレステロールがあります。動脈硬化が心臓の血管にあると狭心症や心筋梗塞、首や脳の血管にあると脳梗塞など、心血管病の原因となります。

コレステロール値への正しい対処として、現在総コレステロール値は使われず、悪玉と善玉の値をもとに治療の必要性が決められます。特に女性の場合など、悪玉が高くて、善玉が高ければ動脈硬化がほとんど起こらず、お薬を

飲まなくても良い患者さんがたくさんおられます。

逆に悪玉がそれほど高くなくとも、善玉が低い、糖尿病、高血圧、喫煙、両親や兄弟が心血管病を起こしている場合は、動脈硬化がかなり進んでいることもあります。

動脈硬化の進み具合を簡単に診断できるのが、頸動脈エコーで、首の頸動脈に超音波を当てて、頸動脈の内壁の状態を診ます。動脈硬化がある場合は、内壁にコレステロールが貯まり厚くなっていたり、血管壁にコレステロールの塊が見えます。

その場合はお薬を使い、悪玉コレステロールが強力に下がると、コレステロールが全身の血管壁から抜け、心血管病になりにくくなります。

一方、頸動脈エコーで動脈硬化がない場合は、お薬で治療する必要はなく、それ以上悪玉コレステロールが増えないように、食事に気をつけた

り、運動をするだけで十分です。コレステロールの治療は、その値だけではなく、頸動脈エコーや病歴で決めるのが正しい対応です。